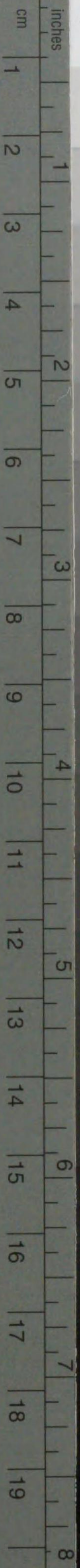


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches



91 岩波講座 東洋思潮 [東洋思想の諸問題]

神 僊 說

武 内 義 雄

岩 波 書 店

神

僊

說

武

内

義

雄

支那歷朝の正史の中には藝文志とか經籍志とかいつて、その時代に存在した書籍の目錄をつらねた部分の存するものがある。これらの部分によつて我々はその當時如何なる書物が存在したかを知り得ると同時に、またその分類によつて、その時代の文化の傾向と特徴とを髣髴することができる。例へば、漢書の藝文志では神僊關係の文獻は方技略といふ部門に收められて居るが、所謂方技略とは醫學藥材關係の部門で、その内が更に醫經・經方・房中・神僊の四部に分たれてゐて、神僊の部によつて居る書物は大概養生術に關するものである。然るに、隋書の經籍志を見ると、種の書物は道經の部に收められてゐる。隋志の道經部は、梁の元孝緒の七錄といふ目錄の仙道錄を改稱したもので、その下に經戒部・服餌部・房中部・符圖部の四部分たれ、神仙家の文獻と道教の文獻とが同一に取扱はれてゐる。これは漢の時代までは神仙家といふものが特立の地位を保つてゐたが、その後漢末から六朝にかけて道教といふ宗教が勃興して神仙術が道教の中に攝取せられ、道教の體得者が即ち神仙である如く考へられるに至つたことを物語るものである。

實際現在の道教の内には古い道家哲學もあれば佛教思想もあり、張道陵の主張も神仙家の術も混じて居て、これらの内から神仙家説でないものを捨象することによつて神仙家説の如何なるものであるかを考へることもできる筈であるが、私は寧ろ未だ張道陵も起らず佛教も渡來しない前に既に道家哲學から離れて独自の立場をもつてゐた粗笨な神仙家説を先づ考へて、次に道教の内に攝取されて行つた經路を考へて見たいと思ふ。

神僊の僊の字は又仙につくる、釋名に「老ひて死せざるを仙といふ、仙とは遷なり、遷りて山に入るなり、故に字を制して人傍山を作るなり」とあつて、神僊は不老長生を得んがために山に入つて修行するものとされてゐるから、山に關係があることはいふまでもない。さうして神仙説の起源は齊の八神と深い關係があるらしい。八神とは一天主、二地主、三兵主、四陰主、五陽主、六月主、七日主、八四時主の八つで、天主は齊の都城（今の山東臨淄縣）の南郊山下にある天齊淵といふ淵泉に於て祭られ、地主は齊の南方にある泰山梁父を祀ること、兵主は齊の西境東平陸監郷にある蚩尤の祠を祭ること、陰主と陽主と月主とはともに齊の北海岸線にある名山、三山・之罘・之萊をまつること、日主とは齊の東北端にあたる成山（或は成石山ともいふ）に於て日出を迎へて祀ること、さうして四時主は齊の東海岸にある琅邪を祀ることである、従つてこの八神の祀は都城の南郊にある天齊淵を中心として齊の四周にあたる名山を祀ることで、史記の封禪書にはこの八神を祀る風習は古からあつたもので或は太公以來のものだともいはれてゐると記してゐる。實際この祀が太公以來のものか否かは明瞭でないが、同じ封禪書の中に管仲の言を引いて古者泰山梁父に封禪したものが七十二家あるといつてゐるから泰山梁父の山祭が甚だ古いものであることは明瞭である。さうして管子の戒篇に桓公の語をあげて

我遊びて、轉附朝解より南のかた瑯邪に至らむとす。

といひ、孟子にも景公の語をのせて

吾轉附朝解を觀、海に遶つて南し琅邪に放らむと欲す。

とあつて、こゝに轉附とあるは之罘の訛り、朝解或は朝儻は朝鮮の誤りで成石山を指すのであるから、之罘・成石・琅邪の三つで北東海岸に沿へる名山を代表的に出したものであるらしく、従つてこれら海岸線上の諸山を巡り祭る風習も相當古いものであることがわかる。さうしてこれら海岸線の山々を祭る巫祝の徒から蓬萊・方丈・瀛州の三神山がかつぎ出されたらしい。史記の封禪書はこれを説明して

此三神山は相傳ふ、勃海の中にありて人を去る遠からず、……諸僊人及び不死の藥皆あり、その物禽獸盡く白くして黄金白銀もて宮闕を爲れり。未だ到らずして之を望めば雲の如く、到るに及へば三神山反りて水下に居る、之に臨めば風輒ち引き去つて終によく到るなしといふ。

といつてゐるが、これを熟讀して考へると、恐らく蜃氣樓から起つた傳説らしく、清朝の儒者顧炎武がその名著天下郡國利病書に於いて

山東三面海に瀕して、登萊二府島嶼環り抱く、其青濟にありては則ち樂安・日照・濱州・利津・霑化・海豐の諸境皆海に濱して界となし渤海と稱す……又東方の極、碣石より朝鮮諸國に通じ、直に扶桑に抵る、一望汪洋浩瀚、涯津際なし、……博物志に曰く、海中蓬萊方丈あり、金銀宮闕仙人の集る所と、十洲記に謂ふ、東海中五百里不死の草返魂樹ありと、顧ふに其說荒唐不經と雖も然れども登萊の海市樓臺城郭人物旌旗の狀瞬息に成りて千態萬狀摸寫すべからざるを觀れば則ち海中靈鬱の氣洩れて奇怪瑰偉の物と爲るも固より亦理の宜しくあるべき所なり。

といつたのも成る程と首肯せられる。思ひ出すとはや十餘年も昔の話である。私は支那に遊んだとき、一日泰山に上り巖上に立つて東をのぞむと山東の山々は萬波の起伏する様に遠くつゞいて、西の方魯の平野には汶水の流が霞にうかんで身はさながら羽化登仙する心地がした。山を下つて濟南に出で、滞在數日の後汽車に搭じて臨淄に向ふ。辛店

に下車して南郊山下をさがしまはつた後、やつと一つの小さい池を見出した、池畔に壊れかゝつた一字の堂があつて前に一基の碑が立つてゐる、土人にきくとこの池が即ち昔の天齊淵で今は龍池と呼んでゐるといふ。池の大きさはやつと半畝ばかりでこれがどうして天主の祭り場であり得たらうかと疑はれる程であるが、稷山は南に鎮して淄水の流れがありし昔を物語つてゐる。河を渡つて北し臨淄城に入つて稷下の盛時を思ひやりつゝ南をのぞむと牛山は今も猶昔ながらの濯々たる姿をあらはしてゐる。臨淄を辭して青島に出て遂に勞山にのぼつて大清宫に泊る、山は山東の東海岸に屹立する名山で、琅邪・成石とともに神仙の窟宅人天の洞府として知られてゐる。漂渺たる煙海に白雲の徂徠して飛鳧の明滅する様は泰山の眺めと趣を異にして蓬萊・瀛州の様な空想も斯様な雰圍氣からこそ起り得たらうと感じたことを記憶する。況して登州の海上には砒礪・城堙等無數の島嶼が連なつて遙かに遼東半島と相對してゐるあたりでは昔から蜃氣樓のよくあらはれるところだとさへいふから、空想は空想を生んで奇怪不思議な神仙傳説と成つたものであらうと考へられる。

齊の地方に空想的な思想の多かつたことは鄒衍の五行説や九州説を見ても判る。鄒衍は齊の宣王時代の人で、宣王は禮を厚くして天下の學者を招いたので當時齊の都城は學者の淵藪文化の中心であつた。鄒衍はこの時にあつて彼特有の新説を吐いて時目を聳動した。彼は先づ黄帝から當時まで一般に信ぜられてゐる歴史から抽象して時運の推移が木火土金水の五行消長の理に本づくものと結論し、更に之を黄帝以前の歴史のない時代にまで推し及ぼし、又之によつて未來を豫知することもできると説いた、これが彼の五行説である。彼は又地理に於いて昔から支那は九州に分たれるが、この九州の外に九州と同じ様な國が九つあつて、之が本當の九州である、この九州の外には小海が環つて

居て、小海の外に又大九州が九つあつて大海が之をとりまいてゐる、さうしてこの大海が即ち世界の際であるとする主張した、これが彼の九州説である。要するに彼の主張は既知の事實から類推して未知の世界を想像したもので、この想像が又神仙家の飛躍を助長したらしい。史記の封禪書には「鄒衍陰陽主運を以て諸侯に顯れ、燕齊海上の方士其術を傳へて通ずる能はず、則ち怪迂阿諛苟合の徒此によりて興れる數ふるに勝ふべからず」といつてゐる。史記に記された三神山の神話が列子に見える五神山説に變つたのも恐らく五行の數に關係があらう。五神山説は次の如くである。

渤海の東幾億萬里かを知らざるところに大壑あり、名づけて歸墟といふ。其中に五山あり、一に曰く岱輿、二に曰く員嶠、三に曰く方壺、四に曰く瀛洲、五に曰く蓬萊、其山高下周圍三萬里、其頂の平かなるところ九千里、山の中間相去る七萬里、以て鄰居となす。其上の臺觀は皆金玉、其上の禽獸は皆純綺、珠玕の樹皆叢生して、華實皆滋味あり、之を食へば皆不老不死、居る所の人は皆仙聖の種にして、一日一夕飛で相往來する數ふべからず。而れども五山の根は連著するところなく常に潮流に隨つて上下往還して暫時するを得ず。仙聖之を毒て之を帝に訴ふ、帝群聖の居の流失せむことを恐れ、乃ち禺彊に命じ巨鼈十五をして首を擧げて之を戴かして、五山始めて峙る。龍伯の國に大なる人あり、五山の所におよび一釣して六鼈を連れ、合負して其國に歸る、是に於いて岱輿員嶠の二山は北極に流れて大海に沈めり。列子湯問篇より節抄

五山を説き出しながら二山を流してしまつて三神山だけを残したところに新舊神話の矛盾が打消されて面白く、特に五山を並べたところに五行説の影響が窺はれる。さうして彼の地理説に於いて提唱された大九州説は山海經の様な書物に發展して、想像の世界が眼に見る如くに描き出され、はては周の穆王が西王母の國に遊んだ傳説や黄帝が華胥氏の國を夢みた神話にまで進んだものであらう。さうして列子の黄帝篇に華胥氏の國を描寫して「華胥氏の國は兪州の西臺州の北にありて、齊國をさる幾千萬里なるかを知らず、蓋舟車足力の及ぶところにあらず、神遊するのみ」と

いひ、「齊國をさる」の句にその神話の生れた郷里を暗示して居るのも面白い。

かくて發達して來た神仙家は秦の始皇が天下を統一するに及んで一段の躍進を遂げた、史記封禪書は三神山の記述を終つた後に於て「秦始皇天下を并すに及んで海上に至る、則ち方士之をいふ數ふるに勝ふべからず、始皇自ら以爲らく海上に至るも恐らくは及ばざらむと、即ち人を使用して童男女を齎し海に入りて之を求めしむ」とかいてゐる。この記事は恐らく始皇の二十八年に齊人徐市（又徐福に作る）に命じ童男童女數千人を引きつれて海に浮び不死の神薬を求めしめたといふ傳説にあたるものであらうが、彼等は皆神山を望見することだけはできたが、風のために引き去られて行かれなかつたといつて歸つた。然し始皇は未だあきらめることができず翌二十九年には再び海上に遊んで之に登り、遂に琅邪に至つてかへり、その後三年碣石に赴いて燕人盧生をして仙人の羨門や高誓を求めしめ、又韓終侯公石生をして不死の薬を求めしめた。その後五年即ち三十七年に始皇は南の方會稽山に上り、海岸線に沿うて北上し琅邪まで來ると徐市等が大鯨魚のために邪魔されて蓬萊に到り得ないと奏上したので、弩を用意して琅邪から勞山をへて成石山あたりまで行つたが一向に鯨魚に出會ない、やつと之を擧まで行いて一巨魚を見つけて之を射殺したが、更に海西にそひて平原津まで行くと、始皇は病にかゝり遂にその年七月に崩御したと始皇本紀にはかゝれて居る。實に馬鹿々々しい話だが既に天下統一の大業を成就して外に求むるところのない始皇に取つて不老不死の仙薬が何よりも望ましく、何とかして之を得たいと考へたのも無理はない。

前漢の代に最も神仙術に迷つた人は武帝と淮南王劉安とであらう。武帝は一面に於いて異端を斥けて儒術を尊び百

家を排して六藝を重んじた明君であるが、又他の一面では神仙術に迷つて色々な説話を残してゐる。元光二年帝が仙を求めようとした時李少君といふ人があらはれた。この人は元は深澤侯の家人で方薬を主つたといふが、その年と郷貫とをかくして妻子もなく常に自ら七十だと稱し卻老の方を會得してゐると吹聴してゐた。ある時少君は武安侯田份の御馳走に成つたことがあつたが、その座に九十餘歳の老人が居て昔話をはじめた。少君はその老人の祖父と游射したところの話を持ち出すと、老人もそのことならば子供の頃きいたことがあるといつたので、一座の人が皆驚いたといふ。少君が初めて武帝に見えた時も、座にある古い銅器を見て、これは齊の桓公十年に柏寝に列べたものだといつたので、よくその刻文を調べて見ると果して桓公の銘があつたので皆が感心して數百歳の人だらうといつた。そこで少君は武帝に説くに祠竈穀道卻老方を以てした、彼の言によると、竈神を祠ることによつて鬼物を呼びよせることができ、鬼物がよつて來てはじめて丹沙を化して黄金とすることができ、さうしてこの黄金で食器を作つて飲食すれば長生ができて、こゝにはじめて海中蓬萊の仙人にもあへるのである、論より證據自分がかつて海上に遊んで瓜のやうな大きな棗を食べて居る安期生にあつたことがある、安期生は蓬萊に居る仙人で氣に合ふ時は見はれるが氣がむかぬと出ないのだといつた。乃で武帝は親しく竈神を祠り方士を海上に遣つて蓬萊の安期生の屬を求め、又丹沙諸薬を化して黄金を作ることの研究した。暫くして少君は死んだが武帝は化去したものだとか考へて黄鍾の史の寛舒といふ人に命じてその方を受けさせた。乃で燕齊怪迂の方士が又多く集まつて來て仙人の話を持ちかけた。

その後十數年して武帝は愛妃王夫人を亡つて悲嘆にくれて居るとき、齊人少翁があらはれた。少翁は鬼神方によつて王夫人と竈神の貌を見せたので御意にかなつて禮遇をうけ文成將軍といふ稱號をさへ賜つた。然るにその後一年程

してその方が衰へて效驗きやうめんなくなつたので茲に一策を案じ帛書を作つて牛に食しておいて、この牛の腹中には奇書があるといひ立てた。そこで牛を屠つて見ると果して帛書はあらはれたが、その筆蹟で文成の細工だといふことがすぐ判つて誅戮にあつた。武帝は既に文成を誅した後、まだその道を盡し得ないで之を殺したことを悔いてゐた際、文成の同門の樊大といふのがあらはれて常に海中に往來して安期・羨門の屬を知つてゐると稱し、且つ陛下がもし仙人に求むる所あらうとするならば、先づその媒介者を貴くして天子の親屬となし信印を佩ばしめて禮遇しなければならぬといつたので、帝は彼を五利將軍に拜し樂通侯に封じ又衛の長公主を以て之に娶し、天子親らその第に幸されるといつた調子で優遇至らざるなき有様であつたが、これ亦その效驗がなかつたので遂に誅にあつた。

以上は史記の封禪書や漢書の郊祀志によつてその大略を抄出したのであるが、之を通覽すると方士等のいふ所はいつても同工異曲ではあるが、始皇當時の方士と武帝時代の方士とを比較すると前には漠然海中の神僊にあつて不死の薬を求めるといつたのが、武帝時代になると神僊に會ふ前提として丹沙を化して黄金を造るといふ練丹術が唱道せられて居る點に相違を認め得るであらう。

武帝の諸父に淮南王劉安といふ人があつて術學を好み方術の士數千人を招致して居た。是等術士の内特に秀れて居たのは蘇非・李尚・左吳・田由・雷被・伍被・毛被・晉昌の八人で、之を八公と呼んだ。彼等は王命をうけて淮南内書二十一篇外書三十三篇を作り、又中篇八卷を作つて神仙黃白の術を説いたといはれてゐる。さうしてその内書二十一篇は劉安自ら武帝に献上して賞讃を得た書物で、外書三十三篇も夙に漢志に著録されてゐるが、中篇八卷は枕中鴻寶苑祕書と稱せられてかつて世間に流傳しなかつた書物である。然るに元狩元年に淮南王の謀反が露見して王が自刎したので、劉徳といふ人が勅を奉じて事件の調査にあたつた時、偶然この書があらはれた。この書の中には神僊・使鬼物・爲金の術、及び鄒衍の重道延命などがかゝれてゐたといはれて居る。これらの文獻は勿論今傳らぬが後の神仙家には重要なもので、抱朴子遐覽篇にのせられた枕中黃白經五卷、八公黃白經一卷、鴻寶經一卷、鄒生延命經一卷などがこれにあたるものであらう。さうして水經注三十二肥水の條に安徽壽春の八公山のことを記して

八公山は樹木なく惟童阜のみ。山上に淮南王劉安の廟あり。劉安は是れ漢の高帝の孫厲王の長子也、節を折りて土に下り、篤く儒學を好み、方術の徒數千人を養ふ、皆俊異にして神仙秘法鴻寶の道多し。忽ち八公あり、皆鬚眉皓素、門に詣りて見えむことを希ふ。門者曰く、吾王長生を好む、今先生衰を住むる術なし、未だ敢て相聞えじと。八公咸變じて童と成る。王甚だ之を敬せり。八士並に能く金を鍊り丹を化し、無間に入出す、乃ち安と山に登り金を地にうづめて白日昇天せり。餘藥器にあり、雞犬これを舐むるもの俱に上昇を得たり。その昇れるところ踐石皆陷みて人馬の跡存せり。故に山は即ち八公を以て目となす。

とあるのは、少し後世の記述ではあるが、面白い話である。さうして唐の道士杜光庭がかいた錄異記には右の記述に更に潤色を加へて記録した後に、武帝が淮南王の謀反を知り太宗正に詔して調査に行かしめると、八公は王にすゝめて、「今日こそ人間を去つて昇天を決意すべき日で、これこそ天遣といふべきである、もしこのことがなければ日復一日と遷延してすみなれた人界を思ひ切れるものでない」といつて、鼎を取り出し仙薬を煮て王と王の眷族とにすゝめると、骨肉三百人は同日に昇天し、薬器を舐めた雞犬までが飛び上つて行つた。さうしてこれを目撃した太宗正はこの始末を武帝に奏上すると、帝は深くかなしんで、これから廣く方士を招き仙薬を求めるところに熱中されたが効果がなかつた。然しその後西王母が降つて仙經を授け靈方を教へたのでやつと尸解の道を得たと附加してゐる（道藏恭字號

録異記卷一)。淮南王の陰謀が露見したのは元狩元年のことで、武帝が方士に迷ひ始めたのはそれよりも十年餘り前の元光二年からであるから、淮南王昇天のことに感激して方士を求め始めたといふ録異記は事實に相違することは勿論であるが、かく潤色することによつて神仙談としての興味は益々高まつて来る。さうして最後に西王母の事を附言して居るのは恐らく漢武内傳を紹介したものであらう。

漢武内傳は班固の撰述とされて居るが、その文體が華麗な四六文でかゝれて居て決して六朝以前に溯るものではない。然しそれが武帝のことに假托せられて後世の神仙談に影響が多いから茲に一言しよう。大體の内容は次の如くである。——武帝は長生の術を好み、常に名山大澤を祭つて神仙を求められ、元封元年には嵩山にお祭をして神宮を建てられた。その後一夜帝は承華殿に間居遊ばされ、東方朔と董仲舒二人が侍坐してゐると、青衣を着た一女子が忽前と御前に現れた。帝が愕いてお尋ねになると女子は、妾こそは西王母の使者として崑崙山から遣されたもので墟宮の玉女王子登と申すものである、足下が四海の尊を輕んじて仙道を求め帝王の位を降つて山嶽に禱祠せられるのをめでられて妾を遣せられ、今日から百日齋戒してお待ちあれば七月七日に王母が駕を枉られることを告げさせられたのだと言ひ訖ると忽然として消え失せた。そこで武帝は東方朔とも相談し、宮掖を脩除して雲駕の來降をお待ちすると、七月七日の二更忽ち天の西南に白雲が起るかと見ると直ぐに宮庭に飛び來つた、雲の中には簫鼓の聲人馬の響がきこえ、その中から王母は群仙を隨へて鳥が集る様に降つて來た。この時王母は九色の斑龍に引かれた紫雲の輦にめされてゐたが、やがて二人の侍女にたすけられて殿上に上られる。二侍女年は十六七、青綾の桂をつけて容眸流眇神姿清發眞の美人と見えた、王母の歳は三十位で高からず低からず天姿蒼靄雲顏絶世、眞の靈人と拜せられた。そこで王母

の色々珍らしい土産ものなどがあつて、不思議な音楽が奏せられた後五岳眞形圖と六甲靈飛符等の十二事が授けられて、將來五岳眞形圖は董仲舒に、六甲靈飛符等の十二事は李少君に授けべきものだと言はれた。さうしてその後武帝はこの二つを手寫して黄金の箱に納め栢梁臺上に祕藏して齋戒盥漱して之を拜讀して居たが、太初元年十一月に天火のために臺がやかれて二つの靈經も遂に烏有に歸した。これは武帝が王母の誠にそむいて夷狄を遠征して降卒を坑殺し臺館を起して百姓をつかれしめた報いだといはれて居る。然し幸に董仲舒に授けられた五岳眞形圖と李少君に傳はつた六甲靈飛符とが世に傳はつてゐる。さうして武帝は屢々名山大澤を祭つた熱心な求道者ではあつたが、もともと仙才ではなくやつと下仙を得て尸解し去つたのみである。下仙とは身先づ死して後尸解し去るものである。——以上が漢武内傳の大體の筋書である。要するに漢武内傳は五岳眞形圖と六甲靈飛符との廣告の様なものであらうが、所謂五岳眞形圖と六甲靈飛符とは抱朴子の遐覽篇にのせられた五岳經五卷と六甲通靈符十卷とに該當するもので後の神仙家に取つては最も重要な經典である。さうして此等經典の作られて行つた経路を溯ると結局封禪書や郊祀志に記録されてゐる武帝が五岳を崇祠した事實に淵源するのであるから、之を神話化した漢武内傳も亦必ずしも無稽の文と排斥することができない。さうしてこの五岳眞形圖が重んぜられ、漢武内傳が作られるに至つたことは、從來海上の三神山を中心として語られた海の神仙談が、五岳を中心とする山の神仙談に移つて行く経路を示すもので、最初渤海海岸に起つた迷信が次第々々に奥地に入り込んで行つた結果であらうと推測する。

道藏海字號に收められた漢武内傳には漢武外傳一卷が附加されて色々な神僊傳説が集められてゐて、その中二三注意を要する事項がある。外傳によると武帝は既に西王母から八方巨海の中に十洲のあることと、東方朔の常人でない

ことをも聞いたので、之を曲室に延いて親しく十洲の所在を下問せられた。そこで東方朔はその知る所を以て帝に答へ、帝自ら之を記録されて十洲記といふ本が出来たとある。いふ所の十洲記は今種々の板本があつて道藏の中にも收められて居るが、その文章は矢張り四六文體で六朝頃に出来たものらしい。いふ所の十洲とは、祖洲・瀛洲・玄洲・炎洲・長洲・元洲・流洲・生洲・鳳麟洲・聚窟洲の十でいづれも海中にあつて神仙の集り神薬の叢生する島である。さうして此等十洲の記載の後に崑崙・方丈附扶桑・蓬丘の三島が附記されてゐて、最後の蓬丘の記事の中には五岳眞形圖のことに言及して居る。次に外傳は董仲舒と李少君が五岳眞形圖と六甲靈飛符とを傳へたことを記し、その後董仲舒は五岳眞形圖を夔巴に、李少君は六甲靈飛符を東郭延に授けたことを記し、更に魯女生が五岳眞形圖の別本を傳へてゐることをかいてゐる。魯女生は長樂の人、少くから道を好み胡麻を食ひ水を飲んで五穀を絶つこと八十餘年に及んだが身體は少壯の如く顔色は桃華の様で、一日に三百里を歩むことができた、或る時嵩山に上つて薬を探りに行くとき忽ち一女子が山澗の中に坐つてゐるのに出遇つた。女生は一見してそれが神人であることを悟り叩頭再拜長生の要を問ふと、女子は、吾は三天太上の侍官汝を當に仙を得べき人と見たから、今寶文祕要を授けるといつて、五岳眞形圖を授け又その使用法を教へた。かくて女生は仙道を成就し親戚故舊に暇を告げて華山の中に入つが、其後五十年して昔の知人が華山の廟前を通りすぎようとするに女生が玉女三十人を従へて白鹿にのつてゐるのに邂逅したが、顔色は昔に増し少々しく、慙ろに郷里の人々に傳言をさへ頼んだといふことである。さて女生は五岳眞形圖を以て薊子訓に傳へたが、子訓は之を封君達に傳へ、君達は又之を左元放に傳へたとある。茲に五岳眞形圖の傳授をうけた薊子訓と封君達と左元放と六甲靈飛符の傳授を受けた東郭延年とは何れも後漢の人々で後漢書の方術傳に名を列ねて居る人である。

後漢書の方術傳に「武帝頗る方術を好みしより、天下懷協、道藝の士負策抵掌、風に順つていたらざるなし、後王莽は符命を矯用し、光武に及んで尤も讖言を信ず、士の時宜に赴趣するもの皆馳騁穿鑿争うて之を談ぜざるなし」といつてゐるが、實際後漢殊にその末期には色々な方術が流行したやうである。此等方術は多種多様で到底正確な分類は出来ないが大體主要な流が三つある様に思はれる。

第一は前漢の經學公羊學や京房易の流を汲んで圖緯とか災異とか星占術とかを唱道するもので方術傳に、「樊英字季齊、少くして京氏易を學び風角算河洛七緯推步災異を善くすといひ、唐檀字は子産、少くして大學に遊び京氏易韓詩を學び尤も災異占星を好むといひ、公沙穆字は文父長じて韓詩と公羊春秋とを學び尤も思を河洛推歩の術に鋭くす」などあるのがその例證で、後世神仙家の間に有名な魏伯陽の參同契の如きもかうした時代風尚の産物であらう。神仙傳によると魏伯陽は吳人で高門の生れであるが性道術を好んで仕官を肯んぜず閑居性を養ひ參同契五相類二卷を作つたといつてその時代を明かにしてはゐないが、後蜀の彭曉がその書に序して、魏伯陽は會稽上虞の人で諸の緯侯に通じ周易を約めて參同契を作り、桓帝の時同郡の淳于叔通に授けたとあつて、淳于叔通も亦桓帝時の人であるから伯陽の時代も略々判るわけである。その書の内容が納甲法で終止して居るので京房易の流を汲んでゐるものと見られる。

第二は于吉の太平清領經に胚胎して張角の太平道・張脩の五斗米道に發展した一派で、後世の道教の淵源をなすものである。于吉は琅邪の人でかつて東海の曲陽で太平清領書と題する神書百七十卷を得たが桓帝の時に至り襄楷とい

ふ人が出てこれを闕下に獻じ、この書は専ら天地に奉へ五行に順ふを本とするもので、國を興し嗣を廣むる術が説かれてゐるから之によつて時弊を匡救するがよいと奏上した。さうしてその後靈帝の光和年間に鉅鹿の張角が太平道と稱する宗教運動を起してゐるが、その名稱から考へても于吉の太平清領書に關係あるものと察せられる。さて張角は自ら大賢良師と稱して弟子を養育し、九節の杖を持つて咒文を唱へ罪惡を懺悔せしめて符水を與へることによつて病を治すと稱して信者をあつめた所、十年餘りの間に數十萬の徒衆ができて、殆ど支那全土に傳般した、そこで教區を三十方に分けて方毎に渠帥をおいて之を統率せしめて着々教線擴張の歩武を進めて居たが、中平元年に馬元義といふ渠帥が事をあげようとして捕へられたので、張角は命を四方に馳せて所在の官府をやき村落を掠奪して旬日の間に天下が響應した。そこで朝廷は皇甫嵩をしてこれを討たしめたが利あらず、曹操の力によつてやつと鎮まつた。かくて張角の亂は平定されたが、その年の七月巴郡の張脩が又亂を起した。張脩の法は張角と略々同じで、先づ病人をして靜室の内に思過せしめ、祭酒が老子五千文を誦して請禱を捧げ、病人は己の姓字をかいだ服罪書三通を作つて、その一は山上において天に上り、その二を地に埋め残りの一を水に沈めて天地に懺悔する、これを三官手書と呼んだ。さうして病者が祈禱を乞ふ際には必ず五斗の米を出すを例としたので之を五斗米道と稱する。かくて張脩の五斗米道も亦非常な勢で傳般して侮りがたいものがあつたが遂に張魯のために奪はれた。張魯の祖父張陵はかつて蜀に客たりしとき鶴鳴山中で修業してその子衡と孫魯とに之を傳へたが、魯は張脩と力を合せて先づ漢中の大守を殺し、次で張脩をも殺し、自ら師君と唱へて鬼道を以て民に臨んだ。魯は夙に張脩の道を奉じて居たが茲に及んで更に之を増飾し、義舍を設け米肉を備へて、行人の宿泊にあて、又食事をも自由に取ることゝゆるした、さうしてもし必要以上に貪り

取るものがあれば道の罰をうくべきものとし、すべて政府の力をからず彼等教團の組織によつて萬事を處理する宗教的社會を作りあげて、その勢は驚くべきものがあつた。乃で建安二十年曹操は大軍を率ゐて張魯を征伐したが、これには曹操も相當困つたらしく、遂に魯を鎮南將軍に拜し閬中侯に封じ、食邑萬戸をあたへ、又その五子を列侯として之を懷柔した。そこで魯の後は永く宗教的の力を確保して後世道教の祖と仰がれる様になつた。さうしてこの教團の間では張陵を天師、張衡を嗣師、張魯を系師と呼んで尊んでゐる。

第三の代表的のものの上にも一言した、魯女生・薊子訓・封君達・左元放の一派である。魯女生につき漢武外傳はたゞ長樂の人といふだけで、その年代を明かにしてゐないが、後漢書方術傳には「魯女生は華佗と同時に、數、顯宗に説く、時事甚だ明了なるも議者その時の人なるを疑ふ、董卓亂後は所在を知るなし」といつてゐて、顯宗は即ち和帝（西紀八九一—一〇五）のことで董卓の亂は西紀一八九九年にあたるから、矢張り後漢末の人で前漢の武帝とは二百年以上も後れて居る。さうして薊子訓も建安中（西紀一九六—二二〇）濟陰宛旬に居て神異の道をたもつ人といはれて居る。子訓はかつて鄰家の嬰兒を抱いてゐたとき、誤つて落して死に至らしめた、父母は驚き號いてかなしんだがその詮もなく遂に之を埋藏した。その後一月餘すぎて、子訓はその子を抱いて來て父母にかへしたので、父母はあやしんで墓を發いて見ると衣類だけが残つて居たといふ。この話が傳はると子訓の名は忽ち都に轟きわたつて士大夫から敬慕されたが、遂にまた京師を去つた、その日は朝から晩まで唯白雲の騰起するのを見たといふ。次ぎに封君達は甘始・東郭延年とともに容成御婦人の術を能した方士で、皆百餘歳から二百歳まで生きた。次に左元放は名を慈と呼び盧江の人で、少くから不思議な術を心得て居た、ある日曹操に招待されて坐につくと、曹操は今日の清會に珍味は略々備へ

たつもりだが吳松江の鱸魚が手に入らなかつたことだけが残念だといふ、元放は下坐かただらひに居て銅盤かただらひに水を盛つて持ち來らしめ、釣糸を盤中にたれると間もなく一尾の鱸魚がつれた、曹操は手を拊つてよろこび、今一尾あれば都合がよいがといふ、元放はすぐ餌をかへて釣を沈めるとまた一尾つれた、曹操は目の前で料理を命じてついでに蜀の生薑が欲しいものだ、先達手錦を買ひに遣した人が歸る頃だがとかこつ、左元放はそれもお安い御注文と一聲命する間もなく使が還つて生薑を持つて來た。又或る時曹操が士大夫數百人と郊外に出たとき、左元放はお酒一升乾肉一斤を携へ、自らお酒をついで廻ると、皆のものは飽醉してしまつた。餘り變だと思つて左元放の通つて來た酒屋を尋ねて見ると、悉く酒が空虛に成つて居るといふ。そこで曹操は不都合な奴だと思つて殺してしまはうとすると壁の中へ消え入つてしまつた。その後或る人が市いちに出あつて捕へようとする、あたりの人が皆元放に見える。後また或る人が陽城山の上で彼を見つけて逐ひかけたら羊に化けて羊群の中に走り込んだ、乃で群羊の中に立つてお前の術をためしたまでで殺すつもりはないのだといふと、一匹の大きな牡羊が前膝かひを屈めて人の様に立ち「遽如許」(ホラコノ通り)といふ、ソレと追つかけると數百の羊が皆牡羊に化けて同じ姿勢で「遽如許」といふのでツイ捕へ得なかつた。以上は後漢書方術傳を抄譯したもので、マルで童話でもよむ様だが、神仙傳や漢武外傳になると尙更奇怪に成つてしまふ。兎も角も魯女生以下の方士についてはこんな傳説が傳はつて居る。

以上三種の異術について考察すると、第一種のもは後漢の初頃には相當な波紋を點じたが、その末期にはさほど重用性を負びてゐない。後漢末に一世を震撼せしめたのは何といつても第二種の異術と之に附隨して第三種のもが注意されて居る。そこで後の二つを比較すると、第二のもはそれが宗教運動であつて社會革命の性質を負ひて居る

のに反して、第三のものは個人的な養生術或は養生法であつて、結局は隱者の生活に入るだけである。前者は道教と呼ばれる宗教の基調であるが、後者は神仙術といふ養生法であつて、茲に吾々は道教と神仙術との境界を認識することが出来る。然し不思議な相をあらはして人心を刺戟しようとする點は兩者に共通で、この共通點に眼をむけると兩者の區別を認めることができない。そこで張角の亂を鎮め張魯の平定に手をやいた曹操は、第三種の異術の士に對しても必要以上に警戒した、さうしてすべての術士を都下によび集めて拘留した。當時拘留にあつた方士は博物志によると上黨の王眞・隴西の封君達・甘陵の甘始・長樂の魯女生・譙國の華佗・東郭延年・冷壽光・唐虞・河南の卜式・張紹・汝南の張費房・荀子訓・鮮奴辜・河南の趙聖卿・陽城の卻儉・盧江の左慈の十六人で、陳思王の辨道論にはこれについて

世に方士あり、吾王の悉く招致せるところ……之を魏國に集むる所以のものは、誠に斯人の徒、姦五を挾んで以て衆を欺き、妖惑を行つて以て人を惑さむことを恐る、故に聚めて之を禁せるなり。廣弘明集五 引辨道論

といつてゐるが、それは幾分杞憂にすぎた様に考へられる。今まで私は魯女生から左慈に至る諸人を主として第三種の異術即ち神仙術を説明したが、魏王の集めた十六人の方士の中には自ら種々の色彩があつて必ずしも一様でない、魏の文帝の典論にその主要なる人々の特徴をあげて

潁川の卻儉は能く辟穀伏苓を餌ふ。甘陵の甘始亦行氣を善くし、老いて小容あり。盧江の左慈補導の術を知る。後漢書方術傳注引

といつてゐて、神仙術にも又専門があるらしい。所謂補導の術とは、列仙傳によると容成公がはじめたところと成つて居て、又容成御婦人の法ともいはれてゐる。後漢書方術傳に封君達・東郭延年・冷壽光らが容成御婦人の術を行つ

たとあるのがそれである。行氣とは呼吸整理で又胎息ともいふ。方術傳に上黨の王眞がよく胎息の方を行ふとあるのもこれである。さうして辟穀服餌は即服薬法である。この補導・行氣・服薬の三つは神仙家に取つて重用な修養であることは後の葛洪の抱朴子の中にも力説されて居る。

後漢末異術の士は甚だ多いが中に於いて注意すべきは左慈・元放で、元放はその法を葛玄に傳へた。神仙傳によると葛玄は字を孝先といひ左元放から九丹金液仙經をうけたが、まだ合作するには至らなかつた、いつも朮を服して穀を絶ち廣く五經に通じ又談論を好んで少年數十人が彼に従つて學んで居つたといふ。彼の弟子に鄭隱がある、鄭隱字は思遠、少うして書生となり律曆候緯をよくし、晩年に葛孝先を師として三皇内文・五岳眞形圖・太清金液經・洞玄五符などを傳受し盧江の馬迹山に入つて修行しその仁鳥獸に及んだといはれて居る(雲笈七籤一〇一〇)。さうして彼の弟子に有名な葛洪が出た。葛洪は字を稚川といひ、少くから學問を好んだが家が貧乏で書物を買ふことができず、晝は自分で薪を伐つて筆紙を買ひ、夜は書物を手寫誦習して勉強した、生れつき寡欲で碁局を知らず、榮利を好まず、常に門を閉ぢ交遊をさけて居たが、さて學問上のこととなると數千里を遠とせず崎嶇冒涉して必得を期した、かくて博く典籍を覽ることができたが、殊に神仙導養の法を好み鄭隱思遠に師事して悉くその法を傳へた。かくて彼は玄業を傳へると同時に又醫術を綜練し、多くの著作を残した(晉書葛洪傳)。此等著作の中著名なるものは抱朴子内篇二十篇、外篇五十篇、神仙傳十卷などで、内篇は神僊方藥・鬼怪變化・養生延年・讓邪却禍のことをいひ、外篇には人間の得失、世事の臧否を評論してゐる。さうして神仙傳は列仙傳の遺をひろつて古今の神仙九十二人の傳記をあつめたもので、吾々は神仙傳と抱朴子内篇とによつて彼の神仙思想を窺ふとができる。

抱朴子いふ、天地の大徳を生といふ、生とは物を好くするもの、是を以て道家の至秘して重んずところは長生の方に過ぐるものがない勸求と。長生の方は即ち神仙術である。

抱朴子いふ、神仙を求めようと思はばたゞ當にその至要なものを得べきである、至要なものは寶精と行氣と一の大薬を服することにあり。然しこの三事にも亦深淺があつて、明師にあはず勤苦を経なければ倉卒には知りつくすことができない。行氣といつても行氣にも數法がある。房中といつても房中の術にも近ごろは百餘事がある。服薬といつても、服薬の方は大體千條もある。初學に教ふるには淺より始めてその要を告ぐべきである。さて行氣は百病を治すこともでき、流行病のさ中へも入ることができ、蛇虎を禁ずることもでき、飢渴を避けることもでき、年命を延ばすこともできるが、その大要は胎息にある。胎息とは胞胎の中にゐる時の如くに、鼻口で呼吸をしないことである。初學者は鼻から空氣を吸ひ入れて、これを閉ぢ、心の中で一つ二つと百二十まで數へて後ち靜かに口から吐き出すべきである。さうして吸ひ入れる時には自分の耳で吸入れる音の聞えない様に、吐き出すときは鼻口の上に鴻の毛をおいても動かない位靜かにすべきである。かくして段々に修練すると千位まで數へられる様に成る。千まで數へられれば老者が日一日と若く成つて行く。但し之を行ふには必ず生氣の時を以てして死氣の時を用ゐてはいけない、一日一夜を十二時に分けてその半夜から日中までの六時が生氣で、日中から夜半までの六時が死氣である、死氣の時にこれをやつても何の効果もない。又氣を行ふには食ひすぎてはいけない、又生菜や肥鮮の物を食つてもいけない、又恚怒は

禁物である、悲怒すれば氣が亂れるからである。予の從祖葛仙公がお酒に酔つた時、夏の暑い時、いつも深淵の底に入つて一日位も居られたが、これは閉氣胎息のできたためである。次に寶精とは即ち房中法である、房中法にも十餘家あつて、或は以て傷損を補救し、或は以て衆病を攻治し、或は以て増年延壽するといふが、その大要は還精補腦の一事につきる。この法は口訣があつて書物にはかゝれてゐない、玄女經・素女經・子都經・容成經・彭祖經などの書物もあるが、たゞ麤事をのせただけで至要な點には觸てゐないから、師について之を正さなければならぬ。釋帶

次に一大藥を服するとは即ち還丹金液の法をいふのであらう。抱朴子はいふ、余養生の書を考覽し久視の法を鳩集して曾て披涉した篇卷は千を以て數へるが、皆還丹金液を大要としないものはない、この二事は蓋し仙道の極で、之を服して仙人になり得ないならば古來仙人はないことに成る。さきに上國の喪亂した時、余は徐・豫・荆・襄・江・廣の數州の間を周旋めぐつて數百人の道士にあつて見たが、中には行氣・斷穀・草木藥法を心得てゐる人もあるが還丹金液のことは知るものは一人も居なかつた。昔左元放は天柱山中で神人から金丹仙經を授けられたが、漢末の喪亂に會して之を試みることができず、地をさけて江東に渡り名山に投じてこの道を修めようとしてゐたとき、余の從祖葛仙公が之に從つて太清丹經三卷と九鼎丹經一卷と金液丹經一卷とを傳受した。余が師鄭君は余の從祖葛仙公の弟子で、又從祖に從つてこれをうけられたが家が貧しくて藥を買ひ得なかつた、余は親しくこれに事へて洒掃の勞に服し遂に馬迹山中で壇を立て盟をたててその傳授をうけ又その口訣を教へてもらつた。そこで江東には以前この書がなかつた、この書は實に左元放から出て余が從祖葛仙公余師鄭君をへて余に傳はつたものであるから他の道士らは全然之を知らない。

太清丹經三卷は太清九丹經九卷の末三卷で、その上三卷は教授ができず、その中三卷は世之を傳ふるに足るものがなくして三泉の下に沈められてある、さうして、下三卷が即太清丹經で、老子の師元君といふ大神仙から出たのだといふ。次に九鼎丹經は詳しくは黃帝九鼎神丹經と呼んで、黃帝が之を服して昇仙した法をのべたものである。九丹とは第一の丹を丹華、第二を神符、第三を神丹、第四を還丹、第五を餌丹、第六を鍊丹、第七を柔丹、第八を伏丹、第九を寒丹といつて、この九丹を服するものは昇天することができるといふ。次に金液は太乙が服して仙人に成つた藥でその功は九丹に減じない、さうして金液が一たび口に入ればその身は皆金色に成るといふ。この經は老子が之を元君に授けたところで、之を一兩服すればすぐ仙人に成れる。凡て艸木の藥を服んでも命を延すことは出来るが死は免れ得ない、然るにこれら神丹をのむと壽は窮りなく雲にのり龍に駕して太清に上下し得る。金丹篇之を要するに葛洪の仙術即長生方は一寶精、二胎息、三服藥の三事で、第一は口訣を要するとして詳説してゐないが、第二第三の二つは相當詳しく説明されてゐる。さうしてその説明によると胎息とは畢竟深呼吸のやうなもので金液は從來の神仙家が藥草を尊重したのに對し鑛物性の藥を貴んだものと見ることが出来る。「世人神丹を合さずして反つて草木の藥を信ず、草木の藥は之を埋むれば腐り、之を煮れば爛れ、之を焼けば焦げ、自ら生くることすら能はず、何ぞ能く人を生きしめむや」といひ、又「凡そ草木は之を焼けば即ち燼す、丹砂は之を焼けば水銀となり、積變して又還丹砂またと成る、その凡草木を去る亦遠し、故に能く人をして長生せしむ」金丹篇などといつて居るのは理論としては寧ろ滑稽だが葛洪の草根木皮と黄金白銀に對する優劣觀としては面白い。

葛洪はまた遐覽篇に於いて種々の道書を研究したことをのべ、その書目を連ねた後、彼はその師鄭君の言を紹介し

て「道書の重なるものは三皇内文と五岳眞形圖とに過ぐるなきなり、家に三皇内文あれば群邪惡鬼瘟疫模殃飛禍を避くべく、道士之を持ちて山に入れば虎狼山精五毒百邪を避くべし、又家に五岳眞形圖あれば能く兵凶を避く、逆人之を害せんと欲するものは皆還反りて其殃を受く、道士之を得るもの若し仁義慈心を行ふ能はずして精ならず正しからざれば即ち禍至りて家を滅す輕すべからざるなり」篇と云つてゐるが、所謂三皇内文は、昔黃帝が青丘に赴いたとき萬神を効召したものだ篇と傳へられて居り、五岳眞形圖は西王母が武帝に授けたものだと成つて居ていづれも左元放以來傳授して葛洪に及んだものであるが、遐覽篇には又自來符・金光符・六甲通靈符等五十六種の符を列擧し、又登涉篇には種々の入山符をあげて居る。彼はその師鄭君の言を引いていふ、「符の老君に出づるものは皆天文なり、老君よく神明に通ず、符皆神明の授くる所」と、又今符が效驗をあらはさないのは符字に誤があるからだといひ、吳の介象といふ人がその達人で、よく符文をよみその誤るか否かを知つたといつて居る。

彼はまた變化の術をかけたものは墨子枕中五行記が第一だといつてゐる。彼によるとこの書は元來五卷のものであつたが、後漢の劉君安がその要點だけを鈔取して一卷としたものだといふ。その法は藥と符とを用ゐて種々の相を現するもので、之によつて人を飛行せしめることもできれば、又笑を含むと婦人になり、面を燈めると老翁となり、地に踞ると小兒と成り、杖を立てると林に見え、種をまけばすぐ瓜ができて食べられる、又地を畫すると河が見え土をおくと山に見えるなど種々不思議な相を現し得るといふ。彼が劉君安といつた人は恐らく後漢書方術傳にある劉根のことらしく、劉根は大守史祈のとがめにあつて、大守の父祖近親數十名を面前に招効して見せた話がその傳記によつて居る。吾々は先に左元放のことを敘した時にも元放が種々の神變不思議の相を現したことを見た如く、かうした變化の術は必ずしも劉君安だけでなく當時の神仙に共通なものであつたらうから、之も亦左慈から傳受したものかも知れない。

以上述べたところを要約すると、葛洪の神仙術は第一寶精・胎息・服藥の三によつて長生——もしできれば不死——を求めること、第二に三皇内文や五岳眞形圖及びその他の諸符によつて凡ての厄難をさけること、第三に變化の術によつて種々奇怪な相を現して人を驚かすことの三點にあるらしい。然し又彼は他の一面に於いて「學仙の法は恬愉澹泊嗜欲を滌除して、内視反聽、尸居無心であることを要とする、仙法は靜寂無爲にしてその形骸を忘れることを要とする、仙法は臭腥を止絶して糧を止め腸を清めることを要とする、仙法は博く八荒を愛して人を視ること己の如くであることを要とする」といつて、秦の始皇や漢の武帝が徒らに好仙の評判ばかりたてて修道の實なきことを嘲つてゐるのは論仙篇、溫然君子人の言である。臭腥をたつて糧を止め腸を清めるといふ一項は結局避穀服藥を意味するので神仙家獨特の術であるが、その恬愉澹泊寂靜無爲なれと教へたのは老莊哲學の主張で、博く八荒を愛して人を視る己の如くであれと諭したのは儒家の道德説であるから、彼は神仙家の術を究めると同時に又老莊儒學の精神も取り入れたものと見なければならぬ。さうしてこの老莊と儒學とを取り入れて居るところに神仙の進歩があり彼の特徴が發揮されてゐる。彼は非常な博覽家である、然し又同時に批判的であることは特に抱朴子外篇に窺はれる。彼が老莊思想を評して「五千文老子に出づと雖ども、然ども皆泛論較略するのみ、この經を暗誦するも要道を得ざれば直徒勞のみ。文字莊子關尹喜の徒に至りてはその文筆を屬する黃老を祖述し玄虛を憲章すと雖ども、但大旨を演ずるのみにして永に至言なし、或は復死生を齊くして異なるなしと謂ひ、存活を以て徭役となし殞歿を以て休息となすはその神仙を去る

已に千億里なり」論仙篇といつた如き、神仙家の老莊觀としては非常にハッキリして居るやうに思へる。彼は徹頭徹尾神仙を信じてゐるらしい、然し昔から今まで不老不死の神仙があるか、ありはしない、乃で彼は仙經を引いて、「按ずるに仙經に云ふ、上士は形を擧げて虚に昇る之を天仙といふ、中士は名山に遊ぶ之を地仙といふ、下士は先づ死して後に蛻す之を尸解といふ」といつて自らも尸解仙に甘んじてゐるのは仙人の悲哀である。

枹朴子の遐覽篇には葛洪が涉獵した道書の目録がのつて居り、その内に「甲乙經百七十卷」といふのがあつて、清儒姚振孫は之を于吉の太平清領書にあてて居るが、後漢書注に「神書は即ち今の道家の太平經也、其經甲乙丙丁戊己庚辛壬癸を以て部を爲す、每部一十七卷也」とあつて、枹朴子勤求篇に「後の道を知るもの于吉容嵩桂帛諸家各千所篇を著す、率教誠の言多し」といつて居るのを考へ合すと姚振孫の配當があたつて居るらしい。又同じ遐覽篇にのせられた天師神器經一卷と鶴鳴記一卷とはその名によつて張道陵に關係する文獻だと思はれるし、陶弘景の眞誥によると九鼎丹經は却つて張道陵の得たところで、道陵はこの書によつて長生の道をさとり鶴鳴山に入つて道書二十餘篇をあらはしたといひ、道藏目錄に上清金液神丹經三卷の首に張道陵の序があるなどの記録を綜合して考へると、左元放以來傳受を重ねて來た葛洪の家學は張道陵にも縁がつながつてゐるらしく思はれる。私は本年の初頭に佛國巴里にあつて國民圖書館所藏ペリオ博士の將來に係る敦煌古寫本を調査した際、その中に唐の天寶十年に寫された道德經下卷一卷 (Pellicot Mss. 2417) とこれと同紙墨と判斷せられる道德經上卷の殘本 (Pellicot Mss. 2329) とを見出した。上卷殘本の首には葛玄の老子序訣——葛玄の老子序に葛洪等の附記と口訣を加へたもの——がついてゐて、その中に「道士鄭思遠曰く、余が家師葛仙公、太極真人徐來勒の道德經上下二卷を受く」とあり、下卷の末尾に「太極左仙公序系師定、河上真人章句」とあつて、これを綜合考察するとこの道德經も張天師道陵の孫張系師魯の定本に葛仙公が序を加へたもので、これ亦葛氏の家學が三張のそれと關係あることを示すものとも見られる、もしさうでありとすれば三張の道教と葛家の神仙術とは實際に於いて同じものと見なければならぬが、然し葛洪が左元放以來の傳説を八釜しくいひながら一度も三張を稱讚して居ないこと、三張の道教が宗教的で社會制度の改革に手をそめて居るのに反し葛家の家學は全然個人的な長生延壽の術であること、及び葛洪が左元放から傳受したといふ太清丹經や金液丹經などを三張に關係づける證據は多く葛洪以後のものであることなどを考へると、これは寧ろ葛洪の後で三張の道教と葛家の神仙術とが密接にむすびついたものと見るべきであらう。そこで私は葛洪までは道教と神仙術とが別々に發展して來てゐると思ふ。

遐覽篇に道書二百九十一部を三類に分けて著録してゐる。かりに之を經戒類・符圖類・丹法類と呼んでおく。次で劉宋の太始七年 (西紀四七六) に陸修靜が道書の目録を撰び、次に北周の天和四年に再び道書の目録が編纂せられ翌五年 (西紀五七〇) に完成して玄都觀目錄と呼ばれた。さうして陸修靜の目録には經書・藥方・符圖等凡て一千二百二十八卷あつたといふから、恐らく枹朴子の分類に本づいてその數を増したものと思はれる。然るに玄都觀目錄に成ると道經の經傳及び符圖總計一千一百五十六卷に諸子論等八百八十四卷を加へて共計二千四十卷を道書の現在數といつてゐて老子列子莊子淮南子は勿論葛洪の枹朴子二十卷、枹朴子服食方四卷、神仙傳十卷までが道藏の中に編入せられて居る (釋藏辯正論)。茲に葛洪の著述が道藏の中に編入されて、大手を振つて宗教としての道教の經典として通

る様に成つた。さうして北周の天和五年にかゝれた甄鸞の笑道論といふ書序に、「笑道三卷合て三十六條、三卷にせるはその三洞の名を笑ふなり、三十六條にせるはその經三十六部あるを笑ふなり」といつて居て當時の道藏は三洞三十六部に分たれてゐたことが判る。又胡元瑞筆叢四十二卷に宋三朝國史志を引いて唐の開元中に道書を整理して藏目が作られ、三洞瓊綱といふ名を賜つたことをのせてゐて、大英博物館所藏の敦煌古鈔本の中に一切道經序といふ一文があつて文宗が孝敬皇帝の登遐をいたみて一切道經三十六部を寫さしめられたことをかいてゐるから、是等を綜合して考へると唐の道藏も矢張り三洞三十六部に分たれてゐたものと考へられる。然らば三洞とは如何なる分類であらうか、僧玄嶷の甄正論に「三洞とは一に曰く洞眞、二に曰く洞玄、三に曰く洞神、之を三洞といふ、洞とは洞徹明悟の義、言は此三經を習へば道理を明悟すべきが故に之を三洞といふ。洞眞は佛法の法體實相を詮するに學ぶ。洞玄は理を説き眞に契ふ。洞神は符禁章醮の類」(釋藏甄正論上)。とあるのによつてその大體が判る。即ち洞眞は經戒類、洞玄は理論的のもので、洞神は符圖が重なるものである。さうして玄嶷は更に三洞の内容について「今三洞經文を考覈するに唯老子兩卷、洞玄の目に契ふ。其洞眞部は即ち是れ靈寶數經、並に是れ近代吳宋齊梁四朝の道士葛玄・宋文明・陸修靜・及顧歡等の僞造。其洞神一部は後漢末蜀人張道陵自らいふ、峨嵋山に於て道を修めて果を證す、老子紫微宮より下降し、道陵に授くるに天師の任と符禁章醮役召鬼神の術を以てすと、道陵即ち自ら道經數百卷を僞造せり云々」と論じてゐる(甄正論上)。靈寶經を以て直に葛玄の作となし、符禁章醮をすべて張道陵に擬するのはやゝ早計の感はあるが、道藏中に編入せられた經典中には魏晉六朝間に僞作されたものが多く、葛玄一派の方士によつて造られた經典が洞眞部に比較的多く入り、張道陵の派の道士によつて作られた符圖の類が多く洞神部に入つて居たことは事實であらう。さうして洞玄部は說理契眞の書を收めると稱して老子道德經がこの部に入れられて居るとすればその他諸子類から取られた莊列淮南等も必ずこの部にあるべく、葛洪の抱朴子も恐らく此に入つて居たに相違ない。果してさうであつたとすれば六朝以後に成ると張道陵一派の宗教的道書と葛玄一派の神仙術の書物とが道藏と稱する組織の中に完全に統一せられたことは明瞭で、自然道教と神仙術とが一つのものに成り、道教の得道者が即ち神仙であることに成つた。従つてこれから後の神仙は老莊の哲學と三張の道教と長生延壽の神仙術とが三巴の様にくみあはせられてゐて純粹な神仙術を見ることができないから、こゝに此稿を擱筆することにする。

さきに私は北周から唐に至るまでの道藏は三洞三十六部に分たれてゐたといつた、けれども現在の道藏は三洞の外に、太玄部・太平部・太清部・正一部の四部がつけ加へられてゐて、之を總稱して三洞四輔と呼んでゐる。三洞の外に四輔が分たれたのは恐らく宋の大中祥符中王欽若が勅を奉じて道藏を刊行した頃からであらう。四庫全書提要によると此時王欽若は張君房をすゝめて事に當らしめた、張君房はこの道藏整理の傍ら、その精要を撮つて雲笈七箋一百二十二卷を著した。君房の書を呼ぶに七箋の名を以てしたのは三洞四輔總て七部のぬき書であるからである。さうして明道藏は宋道藏の後をうけて三洞四輔の七部に分けて各部を又十二類づつに分けてゐる。十二類とは一本文類・二神符類・三玉訣類・四靈圖類・五譜錄類・六戒律類・七威儀類・八方法類・九衆術類・十記傳類・十一讚頌類・十二表奏類の十二である。さうして唐の道藏では、洞眞部の主要な經は靈寶經で、洞玄部は上清經、これに老莊淮南抱朴子等諸子の書が入つて居り、洞神部は主として符圖章醮の類で、分別が頗る明瞭であつたらしいが、宋以後は四輔が

分れて諸子が洞神・太玄・太平・太清の四部に分屬せられたために洞玄部は非常に寂しく成つて、その結果靈寶部の經典が洞玄部に移つたものもあるらしい。従つて現在の道藏では洞真部には葛洪、洞神部には三張關係の文獻が集まつて居るとはいへない。かくいひ得るのは唐以前のことである。これは至極簡單なことだが現在の道藏で唐以前のことを考へるに注意しなければならないことだから、茲に一言附記した次第である。(昭和一〇・六・三〇)

昭和十年八月十日印刷
昭和十年八月十五日發行

岩波 講座
東洋思潮
第十一回配本

版權
所有

編輯發行
印刷所

東京市神田區一ツ橋
岩波 茂雄

印刷所

東京市神田區錦町
精興社

大森製本

發行所 東京神田一ツ橋 岩波書店